禮集抄

撰集抄第一目録

一 僧賀上人の事
二 依祇園御詣有男女殺心事
三 有僧京下西向欲殺事
四 西行三位遁世事
五 澤山僧殺心事
六 深世位人不知名事
七 新院御墓讃別白峯事
八 行賀僧都耳切猟師縁事
九 一和僧都事
十 真誉法眼事

文曜文庫

西行記

十一 播州平野僧教心事
十二 花林院永玄僧正事
十三 雲林院説法聞教人男事
十四 慈恵大師白骨首女人授法華事

撰集抄巻第一目録

撰集抄

序

生死乃長さ眠のごとく醒て。夢のごとくなれば。水の面乃月を実とおもひ。鏡乃内のうつりをまことぞ。思入るべけんや。只妄念乃心のまよひ。ぐさて。生死乃永とよそへ。屠所乃歩つゞの歩ハ。家ゆきかとて。名部。毋畏乃者ハ。里とそかうて。色ゝ方四十余年の事をいさゝか書。彩束さゝ。ゆゝ。ゝやめらむ。ちゝれハ。同愛乃うちれ。遊ぶを。彩舊乃興沼を。撰求。ゝ事の。ゝの集と書。集め。撰集抄と名付て。庭乃右ゝ。

西行記

経て、一筋に紅蓮に成まんとぞ。巻八九品乃浄土に
は思ひ寄ず、十が一をもこゝに、本は八十歳ばかりと思へ
て、百に外を殘せり。抑凡夫の習ひ眼先にのみ見て、高
とこたんす。心老こゝ。衰乃利潤たこゝろの物なり。さ
ま八倫に冥助ぬ。めでたきよんう者る。巻毎に祈る
の事ども、くし義なり侍るこ

撰集抄第一

一 増賀上人の事

恵夫師行者子

増賀上人と云人ありけり。ものしり者
なりけりとも。道心ありて、天台山乃根本中
堂に千夜籠て見と侍れども、実乃心
や付ず。なほ侍りけん。事時すぐ、人伊勢太神宮
に籠て、祈請し給ふに、夢に翁さんと思しきが
来て、示現を蒙り侍りけるとぞ。示現と蒙
給りて、折節なりて、名利を捨ばやと侍る
まゝに、ぐ捨ばやとて、神宮をば食ぐ
ぬ。さんまこと。物とぶらひを、分ける者給ひ

赤ちぶつみて下向し給ひしより是ゝ人不思議の思
をなして物よくゝふよまそ是めさまなすのいとゝさ
ふらゝてやるゝ云て。折かゝみ乃給まゝ。海のもとは
くゝきゝ給らぱり者り。道ゝ猶代こいけ。宮ゝ云ゝう
山へ乃ゝり。年住給ひくゝる。道恵大師の法宝ゝ入給ま
まゝ。宰相云乃物ふくゝるゝとて。ゝる同朋をあり。ゝ
うハ給ゝ。とて是ゝ人も給り者ゝとかゝ師。逐乃大師
ひそうふ招入ゝ。名利と捨給ふとハ知り給ぬ仏ゝまで
の振舞給ゝ。いや只威儀と思ゝて。ゝふ名利とし
きれ給へゝとゝ。いさゝ給ハ。ゝひ者れゝ。名利となゝく捨し
てなゝん後ハさふゝて給べ乃れゝてゝ。ゝきゝ乃多や。

ゝ給ゝくゝとて。立給給者れゝ。大師を門乃外に出給
てぱゝぐゝ是ゝをゝり給りてゝ。ゝぐ海ゝ流となゝ給へ
る。僧加ハ給ふの。大和ふ多武峰ゝ云所ふさゝゝ色
入ゝく。智朗禅師乃窟の。ゝばゝり給者ゝ。ゝ是代
志め給へり者ゝ。ふゝゝゝゝゝきゝのハ名利乃二な
る。正く貪瞋癡乃。三毒ゝ。ゝ者ゝ。ゝ者と奥わ
ゝ物と思て。是と断ゝんためにゝこゝばゝ乃ゝ河ゝを
糠ゆゝるゝや。武勇乃家ゝり生ゝるゝものハ。胡録乃矢
と早ゝ代ゝ。三人の親と援て。一疎と思ゝく。命代失
ゝ名利捨他乃者ゝ。柳の糸細ゝかれ。蘭麝代
衣ゝゝ。秋風代名残と送ゝ。涙ゝ。ゝて乃月

ふる。名利の二ふ墨染の形よりまさりと思へ
会稽とよばれる。詮い只人よ論係せられ世ばをば
ひこのもとりあと。歩い極位極官と貴つあるべ公家の
繁華より列り三千代禅尼より門うれんと思へ
名利の二をはるれざさひ理とをうたぐひなかにと
よびす。曜識止観より眼とさらし。法文の理と。年積
法雨の人ゝられぬりなすし捨ゝて生死の海にぐ
ひ殺ぐ。誰ゝ。見とりて離るんうゝ捨れ
ぐ世ゝと強て思るれ幸の設ぐ法ゝ捨り。志
うあるは出僧賀上人の名利の思ひと思ぐてあり
捨ゝ名ぐ。ぐられるは捨ずや。見又伊勢太神宮

の。法師ゝあるずんぐうみてうぐ。ゝを法花経捨べき
や。貪嗔癡の材毒ひきあひ名利のそこやこなん
分れぐ。川の涙はすがれぐ。天照太神の御光は
消ぬるふこそ。返ゝかゝ。ゝぐ者なゝ。ゝ捨ぐ
幸いの門の世ふるれてまりべきや。

二　依祇園御詣の男殺い事

西ゝ法九重のか。白川の名は形計るる居住て。
深く後世のいゝなこする人捨ぐ人親の處分をゆへ
なゝぐ人は押ゝまて。捨ゝ捨り者ゝまに。祇園
ふ七日籠てゝ。ゝ捨人と初ゝ捨者ふ七日とゝに
御御殿乃法戸と開られてゝ。ゝ捨られ。大明神

の石窟宮(くう)にこもりゐて。いとゞおこなひすましける。後に給ふまで氣色(けしき)もなく御迎(むかへ)して。

それより此事を思へばかりなりと出家をと歎(なげ)かんと御詫宣(たくせん)なりぬと思て打驚(おどろき)ぬれば其方にきえて。此くく業(ごう)ぞの拙(つたな)き身にもあさましき故ある世なりけりよ。ひまなく人朝(あした)に死し。朝にありしもすぐひ夕(ゆふべ)に白骨(はつこつ)となる。悦(よろこび)をさむる時あり。歎(なげき)を止(とゞ)むる事あり。無常(むじやう)轉變(てんぺん)夢幻(ゆめ)。さてれうしをかへさる世乃中に。思ひとゞめてさとりにも。永世乃長き苦(くるしみ)を。歎くばかりなん事なれ。なにかはまよ思てなやゝ自(て)づからなるを切りて素子(さいし)をかへりもいはずして。此川乃ゑをすて行なむ捨(いほり)あはれて。如敷(ころのとく)庵(いほり)志さし

りて。明暮(あけくれ)念仏(ねんぶつ)をぞ申侍りけるが此身をおしむもあらばりなれは。たゞいさゝかよからんと瞑(めい)とすべしとおもひて。里に出て物をこひもらひて侍る便(たより)に二心なく念仏を申侍りけれども。あるりちかの人々にあはれみて。命をつなぎたよりをぞ志侍りけるが。て日数(ひかず)ふるになれば妻子(さいし)も流(え)て。彼所(かのところ)に来り侍りて。ともにかくもらへ侍りけれども。あへて逢事を志給はず。ひとへに念仏をぞ志給へりけるとなんありける。何してか道にもさるべきなれば。こしらへつ縁て帰り侍りぬ。さて彼女房(にようばう)の此ほか(さた)。ひかりある人々様に此ころひ。世渡(わた)る程の具足(ぐそく)どもの人送(おく)り来れば。て自(みづか)らいしなうてぞ。日数(ひかず)送(おく)り給ひける程に世乃中に隠(かく)れ

なりとぞ申されし。慶分撰元年の人、是はやがて滅罪の
く祈までい思いざりきぎ者ゆをもちさまの暗こして。懸
かりべさやこて押さりくろ面をへ中れ主の道ゆ行こ
せろ人乃ゆの方よろ〜ゆせてやうてゆ名切て白川れ居
ゆいりてちろくと云ゆ。中れ重こあられる思てよく
や嘆ゆりばらべ行ちへうとりすべき見ようてころこを
ゆ会仏志給へうといへこばうるりゆげちへうまうくべ
き。一ゆよ行ちんこて。中ゆこざるゆめと云て内ゆ入ぬ主
こむ行まれ元ゆとるり行りて同部会仏し給うり者
主い切横中ちすこ涙て。夜を殘主と老乃孫見すはゆ
いれとゆて涙とるゆすい人乃を行ちく行りゆりかくて

二とゆ申けろこ月十四日の暁よ。中こよ世代遺給
し人ゆ西ゆむこて産し。涙よ家を出給し重ばう
の産せろと人乃ゆを横すて眠主ろこ〜て涙
とり給へりゆろゆ人雲霞乃こ〜く見集
て往生人として結縁とぞし行りゆる其所とう所
留ろ。今の行ろとろゆ中ひ者を中よゆすぐ行よ涙面せこと
満て行りゆ。ゆ中ろ人よちまゆげとるろ〜ゆかゆ
ゆつねまてもろ乃ゆろひまれ何てゆ涙こ〜ゆ
行ろゆ。中仏よ祈てゆ。ゆ〜かれとのこ祈てゆ〜〜思
ひよ行ひをかこゆ。ゆすく歌よ歌とそ人ろゆ。ゆ世ひ
ゆ〜く中世て行〜ゆ行ゆりこてゆろゆ世のゆ行ゆ人

なるそうしたりなりふは武蔵の神乃ことはなれ給ふ
と深く思ひ入給りて悲くあはれ〳〵とおもひ
かりしまとあり捨くに業門の数なり給まんもとへ
てありがたくはすは給しずや我まことはのこのいさ
の本現と家給りあり人とんせんせ中あとがの給と
てあつまる道心の弄ものふとを笑くずして神祇てちり
やとものよをは世とは振捨しとぶ口惜く給りと
押丸者ん人乃義ん人ものはけありて出くく給りさ振
の歌なすの出家道世をんいぶくられくてずすく
財寶ふこそはるべきふ淺ましと思くに一つ屋は
形て後世のはとはさくに給をん事筆はこのべさ

く給り京都度も給うし我朝よりはくく昔乃社と深
ふうは事ふありてはは
を思ふさすすは給こび
世生れ思懐ととび給
乃はは人くくを遊くを
四見えあるこの生数本現大明神これるり久遠成
の如来雑類同塵しまをまつんあとりかく
ゝけなく給りあるを。

三

あ僧京西向寿検事
中法都乃内ふいぶく乃者ともはれでさすへ
ありゝ僧給りから面より始て思まとつ

まて逆色あさましき有様に抱すともさきの遊
蔦なすどうらこさけり人乃家に入て抱きとこハせ給ふまゝ
見給ふにるんバだ人のいろくすてぞ思ひ出しかハ給
ひ柳乃木の枝すともぬり乃ゆうし給ひ孫バ元用ぶ
まざさし給ひけりしかバ人あハれとされて命とさ
ゆり雅の事ハ給りけりとかや或時人乃家より入
てハ見さましそて帷を縫ハさせ給りおれだ此僧の云
様ハ志を尽しを曼羅給りかて給ハりなりとの
ハ人あハれあハれこなすではべ何とても一休ハ時を待ぬべき
るれど便宜よく待ける時すんぱこれを給りてハ但我等は
遊出もとにるまでさ様のこの御有ふりけり給ヘバ

是ハ心してぬくゝ給るべくそれど遊しなすかふ給りだ
だ遊ひこもるどのをて縫ふ参さ時給らんそれ
ど縫さ世給ふ参さそて遊しけりまハ何すしおりふす
おわぼしてぞしてもせ給まども思程給ひとて露
ましもの声孫だ形すくて座しまくり拙すども凡お
ぼくハ今まず人乃玄き給すどすこみを今日ハ白べぬ
生バ世がしとそしらずそて給りそハ後乃さがせとく
そすくまうのすぞもるし会仏中薫文すど誦しして。
思ひ入るさ如なまでもぱ文乃さるんがそさるれさる
さ如どもぞしけり或時下向と云聲の縁ふすらあり
高くかに聲對向しつバいのもとけ給るべきぱせ心文言葉

の能ハ世よし。熱よけすく給ひバ。それから姫に。あきらか
の花のさけるに。露のとれて給りぬるが。おりから
風に吹く。露の落給ふまあをとこて。打涕ぐこて。
みるやうにおさなをさける欅の花にさきしと發旧寄
是こそ深く文ましまして出給りぬ。後ハいづち入らせて（行
にくん。ありけこもんて能ハずとなんいふ聖のありさまうけ
うるかこそ殊に嘆く覚えて給ひぶ堂にあつなをあら
ぬ落れ世よけりるくおぶるうる身に思ふを簡てし山林う
こ翁やして名利の心をそれざんめのにむさするまゆ
ほしの世ぐるまの身をすててそれ塵をうくて乞食頭
陀のありさ海をふされんぱの中まくまへいでんすくぞ
覚へ給ふ。昔の哭泣をとうのなを。一挙万里にまりく。
塵をふくすくうくりぱされども何なる翁の心を發へ旅
ふまでたりしけるやらん。遊てけるく給り。寿さんへあり
かく給ふぞや。欅花をとくそハちるるにぬめしめはや
あるに。花にさいひけ。さて寄。ちちてハ又よ往りおく吹
すざめる風。又らてま來あまりて。花又日うまうり隠
てさばて日ハ廬山よかうくさぬおぶるうる世の中に自縁
をすれやもく。今鳥を留ぐうしぱされども綿そて志でし
う禮をぱさけるうしてすこせるや。顔すんハすぐ給よ。老
の息ゆうさ。前すん君のほりれうとも弁へぞーして。
けるすれ嬰児の。父母よ貪すうごくみしてぱるうしく

もとより仏法ハ人ぜ。仏説ハ人のあるなり。
もとりかけてもとゝざるハ生死乃苦に住るぞう
しなのあれハ也食乃人のハかゝくなるおしの道。
更ばかりなりとゝえて住りぬ事。法師乃住生住
う程載結てりぷんをてゞさぬぶ。たゞこの国どいあ
げかりるゝ住るうりぷんなぞうめんわゝず。後記ん卒
乃来。来山乃ゑをうて。世生れ来ぬ懐を遂めゝ住りを
みゝぶずゞ後よ涙おらて住りき。哀悲しき我ふう
ゑ。ト二国郷巡廻のし。巡ゝ絶二十ゑゑ流物
乃縁縁よ不ゝ。ゑ涙ゝ涙ゝ廻乃つゝり来。後
涙必ゑ恵乃ゝ涙ゝ。たゞひよ老綱をわゞ命。

情のあるゑ。武ハ父母ゝるり。武ハ師弟となり。主従と
して見ゝゝゝし。後も貪ゝ。後先ゝ世国乃
別所代をゝり住でぷ。只一世乃悲しおるひ。紅涙その
事ゝ。被ゝ深ゝ。我後の世乃ゑ孫ゝゝゝゝず。
寅よゑ住ゝるゝゑ住ゝゝゝ世事ゝゝ。ゝ思人
ぷぷゝれの住ゝきハ寅ゝるゝゝ。舊遊ゝ名乃郷
かゝ親ゝ。古の者ハふゝゝびきゝず。仏石鏡ゝ哭
ゝ。顔回路よ先ゝ聖人ゝゝ悲ゝまぬゝ。上
代ゝ親ゝ離ゝ住ゝゝ。況や来世ゝゝ。我朋寅垂右
将軍ハ少ゝて教親ゝ先ゝ。京極大相国考ゝ
嬉ゝ寅ゝ涙ゝ。千万ゝ

根ぞ一分よみそしまえし男食ばりけめ。丁家の寄ハ
兵生死の家狭みさぶらふ時乃郷より国よ世知ハ
男解て。顔の涙の寄そて。爾乃素乃涙ぞ流
よ。後の世の勲をそげまま法人となる。

四

国紀之任遁世事

七条乃里居笑さ世給ふ人く教くひり給く。
文の法師のまこハてくを乃さひきありさ海ぞて給り
久くしてぞ相撲被と楽給ふ方をいまそかりを
家なんめりを中ハ法師ハ下ふ人ひくく伊勢ちを
女房の仲へ人乃ちあひ給りあ遁事よ。
松さうなく　あまのこ海さう　文のうちに　年色てすく

いせけまを　永なくく　ん給して　ましひさなく
うすく　源乃伊勢ん　くれか井ハ　ふれうゆ乃
ふくれて　秋のあまく　ゆをくくへ　ふくちりく
ふれるは　たのむ新なく　ありてく　とまろ物ハは
花ずき　あなた花ぞり　ひまさちを　ぞけまひん
物うり八　鳴ますりて　くそたくそんめ
と涙給りくを。文乃内の人く。ぞを給く。球よあ
ハまこ思をれくうまや給くりさくそうまくをを
河ぞあハ給けめかぬのこうをりをまる。皇ぞ給よなく
まをて四教もいまぞ不ぞ。被と給りとめう　湯あ
れまけるる素乗りを学給ん。のうちどもハ給そ給

国行法師の人か

ゑんさうれいも深き色と思ひとりあづかりしすぐ希なりし。
四位の乃二位とぞ申しし人ぜ事を月ゑんをく後ぜよく
頭の殿なりなりて。もし自ずから押切忽り書みとゝ
つゝ捨てぞげらるもるく海ざれ失給ふ。ほは行年
おぞへ月ゑんを給りてゐるぬとぞの給らけ海つるぞ。ふ
ゐふ雖ゑて給。指をへ日法。い伝数給つる人るも月ゑ給
つぐりけるふ。ぞりがられ書いしきるはふり指く。
約方ゑ頃なり給ゑんぞの実さは。まはけものべかさ
く。通るもけくしがゑ。寛ふ書ふ除寛及ま給。除
命絶は不通者ゑ。三遠乃ちまく。ゆゑの醍ゑん。
書ふ海寛多はそかいざうけくるす。海く悪頃にぐ

ふ物なり。ぞまはけまぐはるのぞりの花の光ゑ。
なぐく善提の方ぞ。ゆんぞ海。怪戒
及絶不敬遠今世後世為俗ゑて冥遠の悪きこ
ちゑは。戒後不敬遠のこゑそ分をぐゑもくなれぞう
しゑく思ゑ光とふり指く。戒後の切法とぞくうん
と思給れど年経て思るまふ年はものびぐく
て海ゑとすぐ涙ふ給りぞうるはは三位乃俗ふ数ふ
く熟給ゑん。海山きゑんゑ。遠んのさゑ給いざ
るけ重ばゑてぞを乃て給つぐりけゑて。きく。そて
給り。さてを遊里乃ふ懐代とのそゑひなばふ。ゑれ初
引指乃人るてこゑ。伊勢乃ふゑ。こて給ゑゑ。

すぐ侍るよわそんけり侍り。

五　宇津山僧殺心因縁事

宇津山僧殺心因縁事

山法あげまちのうへさすへまりの侍りしに宇津の山
の麓の樵夫とし　がくそうそく。奥深くゐ入て侍り
きゐのいしぐたゐ侍るの細道のいぐそたよ。日うぐ者もそうそぬ
まかよ。形のごくそうそ居侍く。産孫せる僧あり。給へ
四十ばかりあをそうんと見侍るいふいげくの人のな
みにけるくうをは何ものらむ。殺心の因縁やまい
しきまし。為侍りしかん。我は見わ横国乃者や。武勇
の家よまて。ニコ八乃妖の者をとそうへて。胡縁ゆ者
とぱくうべきたるの者ありきたりのまでも生死事

のおそ侍しへうえてよりくうをたげめて。産孫すぐ
たりしかも紹ゆ世代振ぱすて侍る程よ。年
ばの女なん多海りみ。ふしくぱ。ゆもうぐ海で。ゆうゆ
てけゆよ義を侍り。初へ妖海とや寺ゆ侍りし代。
初者ゆもとかくや寺れたゆて。人ゆもうれどぱ。一
年家ゆ侍りうり。ゆくゆ里よ。て物代をてうさけど
くの命をとけぐゆ侍り。今ゆいの澄てゆくく物すどのさ
ゆ。ゆたるぐを侍ゆ孫へ月ゆ二三ゆうんどうひ侍るゆ
うくその結りをてゆのまりに中く浦山ゆえて侍り
しくぱ。祇ところもにすゆゆをさすゆ。ゆくゆ侍りし
ばゆ。ゆゆすゆ祇ゆ。ゆ人ゆめや。まるゆたげひり

和歌のもりかくしつべけれどこの一巻をいと懇ろに結へ。
み給てこれをなかめよとてつくづくとまもりてハんへ
ざりしつるにつくづくと不思議のいとてあるべきかとも覚
ずして後と繋ておかりぬるとて歌へ海ゝさふかいたをさ
ぐるべきこゝちしてなりしかの思
いざるふ清興国よりそこへ来て久しくさかりなる海よ
美道ゝりけるひ給りしかばたまるふいかばかり
しかしにはのふむるくやこゝぬ数いのなりさ海はすす
えてそ給る京・度月・唐朔のこゝ堺を滝ゝり給
迷ハ且閑之。都ふ秋津洲乃昔の賢さ人ハんゝくく
まりゝ給ばゝゝすべれりしんにハまのちゝり見給

しふ。中ゝさすひるゝ給りき昔乃海よかれて茅
の松風よ雲消ぬ月ゝ見給ん。滝山家で給
家ハ給ゝなく書ゝ給ふ給ふるふ海のりゝゝ山の
をまひのすゝゝ事とみゝゝ事とゝ給しハ海
と僧事給りまの給ゝりそれを稼とゝ給ゝりしハ。
書給給給乃用う流ゝんさてを今ふいゝなゝ海も
あゝをりすゝんと過ゝも滝山ゝ給り抑産稼給ふ。
いゝなゝ親給ゝや方給給給ゝふふ給給りて。
んと拾べさゝやふ海水をけりゝ。まるこゝふふ
ゝんとゝてふ書給給ふふゝけべさゝやゝりていふい
ゝだゝんゝまゝゝすべりゝ辛べさゝやゝ給ハ来乃道ふ

作べ。海行ハ屍すてと作りすん。会い若麻の如し。そ
へ猫又よ作りしと云。古人の詞ありぬ。くいをとり
て。産猫し結いぐこれで云業れ中れ。云業の作
よ作まい。百年世量の作場を選んあも海さり
やと作りん。作るる義と。思ふ海ありまるべ業こそ
打ぶと作人めを

六

浮世作人不知世常鳴様世後事

色ふ。法城後國さるのよ射と云方ふ海ら作りこ
まし。後里へ海ら作りて。奥まれ清りて
生。賜あ作まりて。郷の市のごとだぐ海のいろら。
山ら来のと。絶布ぬあらひとらからふ。

人るの族と奢奢せり。中ふいあるくみさら
まなるハ中にこげす。頭ハさりふ雪をいさ
ぐ。腰ふんそぐ作よ。あげさらとりかめて今日
明白とさるるの。ぶげの行ら命を資ん
そこぐの作と様。人らいをあぐ系して奢
奢せる事を。作りしにず作る洞のこれて
作りき。空也上人ら。ふげの家寞のとぶ作
物さぐと。郷の四条ら辻をさこそ物作と
ぐさふ。見こそ困るまして遊鷹ていれ過
ておりくんぐもあるまふ思ぶれ作りてふ
くに悪ら源せ作るて作りき。世中と作ふ人

ん翁がくるまこゝに行あの行乃ちゝはの清ぬるゝ秋
乃田をかのうゑてすゝしひろいあげまれ屋で光れ見て
ざむめろ。僧よ白波の立すゝ。光はのめらふだろうされて。
年いかゝるゝ山けぬまでぬんハむゝふかゝで思入会仏
の田をそゝていや雪れ暑みられ作ゝん事。逆
くゝいゝくゝ作りむるゝくゝ忘乃雪しきうえめくゝタ
ハむのまかりゝ雪ゝ。ぬりゝかりゝ釈ゝ。ゝへ
ゝゝんと年や作ん。思いそれて暮ゝり送り。
雪ゝはにて。所の煙ゝ。ゝへぬゝくゝへゝ
ゝ雲汗とゝゝ。翁ゝ。別ゝ。暮ゝをられで。
あゝゝがゝゝれ秋ゝのゝ。ゝ身ゝゝて。僧ゝ名ゝと

見ゆゝ。歌ゝるゝ白骨ゝゝ。ゝゝれで我もはゝるゝ。
人をあゝなゝ世ゝゝ。ゝに行ゝとゝゝくゝどゝぬゝと。
ゝゝむゝゝゝ。ゝ。ゝの花ゝゝて行ゝゝゝあゝ。
ゝゝゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まてぞ悪因のちまことゝえられなりてぞ又人界へ来り給
はゞ目は渇燋の素に望て風にかゝめく肘なりしへ苦疾
の屈ことも。照を手しかるべし渇水渓へ波面には
かゝりるは。生死海乃船をとすゝまでてこそ又悪趣
におもむき侍らんずれ絶なし螺覚侍りなん六道四生
の間。おそこ妄に徘徊して趣に蹉踊してずこーと
車の庭とめぐりふたがりず。志てしをさば海の一むすん。
生老病死残害に乃苦に役責てさぐ侍るにう苦
母にながきされぬる照しもやもおろかなり浮かしされ
ば沈に沈むて思へはうかふ浮も浮にはなるとぞ志けむを
沈にあらずずかひちとるへてめぐりまり。実にそて

しなりけるへし。

七 新院御墓讃州白峯有之事

過し仁安の比西国はる〴〵修行仕り侍り
し次に讃州みを坂の林と云所にしばらく住侍り
き。深山辺のなかれにまて。庵りむすびて住ゐ来
こゝかしこ山中の名ある花の木を情によもの風。
誰とへとてかまふこもゝさびしくのこうづ白露りけり
りまーるすくいふ事なし長夜乃あか月さびしき蓬
乃都とやゝまぞ侍るはけしきこと断侍りかくろ梢は
猿乃声のあらしを侍し旅とほのぞ侍るすゝてお
ゆのふしそかゝても侍るべかりしいづき世の中には思

とゝぶ給ひて男ゐりしうへ給へるんとゝゐり
し程よ。彩流乃山墓百代おりみちんとて四墓と
云あり弱ゝ有りゐりしに。杜乃一村ちげまつかりに。
ムぐさめさきまりゝたりぬ是るん寺墓やと今更
つこさんゝされて物と見てぞきのおゝり乃なりし
事ぞゝ。清水坂紫雲乃間ゆやをゝ強て百歌
よゐ作ゝまさも。淀宮淀乃うてるゆん。三ゆ代の世
翠一のかんだゝゆざやうすて古まるゝつまゆかゝらんと
のゝぞおわり也給ひゝぞうゝ。方様のまりゝごゝと言ひ
ゆゝざゝも強のゝふゆゝ淀芸い花乃家と出るゆ。
妹い月の景乃興ゐ。さも給ひきゆゆ思ゝさや今

かゝゝべゝゝはゆ為てもゝりこさや。俺ゆ為ちち出
山中のゆゝゝゝれきゝふゝゝ給ゆ為ゝゝ。貝淀ゝ給
ゝも也ず。清水花ゝ勝ゐゝ。むり僧一人ゝる兄有ゝ兵墓
の松風ゝゝけゝゝ兄のゝゆめて為ゝぶゆゝゝゝぬおり
さ為也ゝりふゆすゆ孫ゝ淀ゝ給ゝ給ゐゝを
のゆゝおいりおりゝゝゆゆ給りゝゝゝ給ゆゝを
は為給ゝゝす。されゝ男ゆゆゝゝゝゆゝゝゝゝゝゝゝ
天乃家百家のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
まゝまゝゝゝ給ゝ孫ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

つゝ語ひろんなれども。隠生命忘して。さべき行ぶこと
侍るべし。只行てこそ侍りなれ。ゆゑ。仏果菩提の道乃
こゝろ。ゆゑ。こゝに侍るとゆゑ。かくこそ思ひ侍るまゝに。
洞のうちいで侍りしうへ。
よもや恋慣れぬ乃ゆゑとてもがらん法ハるゆゑ
とうらるゝわしれく侍りき。風裏い今ふけゆめさざ
なれども。さて侍りし。なるれめるよ侍りさてこそ
仏保元の初乃年。林七月の法といふ乃法皇
うるくなるこゝ語ひろん。天林雲遠て。花の都
ふこゝろ侍りて。合戦のゆゑひうけ侍りし。
なげさ多のゆゑ。侍りめる乃ゆゑもうておい

しまゝ中に。俗ふ手白乃ゆゑ上と面の法
西行ゆゑひありてゆゑとゆゑ。天と乃ゆゑ地と
うごゝろすまで。乱まゝゆゑひ侍りて。ゆゑ及て。大嫌
乃よ。うゝゆゑ。風乃ゆゑ。こゝに法。古い軍。
ゆゑり新流乃ゆゑ方の軍破ゆゑ。ゆゑ乃ゆゑ
ゆゑるゆゑ。ゆゑ。ゆゑなく。ゆゑさゝ。ゆゑと。ゆゑ者
ゆゑ。ゆゑりて。ゆゑゆゑ。ゆゑまゝゆゑ。ゆゑ侍り
しゆゑんゆゑまゝりゆゑに。ゆゑなる。ゆゑり出て。ゆゑ遠
ゆゑく侍りゆゑて。法ゆゑ。ゆゑりゆゑ。新流ゆゑ
ゆゑの中ゆゑり求ゆゑて。仏ゆゑ寺ゆゑ。ゆゑ侍ゆゑ
ゆゑ者ゆゑ矢ゆゑ。ゆゑら。ゆゑ侍ゆゑ。ゆゑ命ゆゑ。ゆゑ侍ゆゑ。ゆゑの

京般若野のあこ妹よ。亡葬しなりあること。勅使
ゝらて。死ひ寅旅乃ゝ為ふ。濃おこ〜なりけるこれ
ゝ〜にあるこれ古備在の寺うる。誰う知ざううき世へ
かふ〜とふこにあやうくけうるき身とらて。
ゝうかよのこ伝りてむ〜く明暮へるこく。
乃思ふ〜まく〜時。却とあ者てさけべとも叶ぞして。
思慮みのこ強めゞり伝りんぶとふかるべし。感
裏こなく。云事をもるれ伝んを なりとも。仏乃
伝見お度とゆ〜てまけりゝ〜ばなどう祈へばゝ貴。
況や盛裏をるゝ〜〜きとや。云事すゝやうるとやた
だんなゝ〜けめて。往事と思祈へどこうを羨るやうは

つを伝ゝ。怪を歎を。感を裏る。こふ仏のまへ乃うゝ
色おるべし。

八

行基僧都耳切因縁事

むゝ京良の京山階寺に僧すて行基僧都云
人いまそうりけう平倭大徒の遺者すてそ伝り者。
並なる記智者すていうゝくぱ乃弟ともと施し給へ
つをゝう人るりゝ三面の僧坊ゝすゝ伝りけうふ。この如
者方ふ四十あまりあみゝく伝う法師のゝこめさ毎ゝり
始てすかゝおりさ風いとゆゝふなん人て伝う祈乃
をのゝゝこのびやうふゝりまて行るゝゝゝて行基僧
却のゝすゝけうやゝけてもゝをゝりゝる師ゝきゝゝ

まれじやとも云ふ中ごろ一日芝伯し給と日思さ
記てそまづりちそくめしけ給ひし男て恐くア
にるん我うし後よ悪疫出くこよ死よ伯ちんとす命
のあるこさいちる事りて伯苦痛よいさてるぐし如べ
ちを伯るめ祖よ当時ゆすく給へる。医の師ふうを也給る
ば。ゆそかん重人の古の耳をとれて来れたくろいや
うんといふぢでい設七孫の財を山ちとつめるかこ。
若痛やむべるずしや伯りしかるもいるる重人も。
我耳切てあるる給ふ事伯しとと男伯りてくめがひ
なれ源のこうどれて伯りけるる祖よれしはちるそこ
の中事こそ。ゆそ源事りまれど。ゆすまびやさんるへぞうる

事りや伯るんずんとん人乃伯番伯りけまべそ
やと来伯りそうとてちるぐくしなくめりと人表
よそそていうるる疫ぞちんとの給ひれどうかさ
めれて伯りみる小用をあてらまぞうるゆしとも事
をるのちなしず伯りけまでちる事りばいぐ医す
しとてみそりとてた古の耳を切てこを也伯り者
まべはと合て源を流し所係るくさる伯りぬくく
上人い我身れいるれ事いる霧れるひ給いずひ注所の
行事のこそおどけうるく男給うけるかして又人う
変ゑくこるるりれい今しまを記さする学ま道と男給
て。三梅と云原よ。男澄て。ぞ簾つま給へる落さなず

まげはすりさげて。衣乃色をも又はすみぞめにし。玄賓
の昔乃跡ゆかしく。吉野が奥に分入て月を送り日をくら
し給へりしが。かくて何の頃にか有りけん。僧都のまどろみ
給ひしに。十一面観自在菩薩枕乃上にあらはれ給ひて
いかにぞや汝ありし身は速に今をさるべきなり。
実に慈悲は始めおはし候ふてかぎりなきあはれなる事なる
これぞとて。さきに何やうに先させ給ぬうち驚きて。先耳を
すまし給ふにすべて候ひしが。なれども何とてかかる
給ふべきなれども。いかにせん。かゝる事有りけるは不
思議されども仏乃御恵みにこそ。先見へて有りたる
よりはべらずかしこくて。うれしいひと。つまびらかにせられけりと。

侍りける。あはれなりしかば。遂にしたがふ事なく。ふうてんと
有る。ある時まかりしが。昔の跡を。かたる有りしに。
玄賓僧都の御夢に見え給ひて。たゞちに山伏となりて。
慈悲を以て。らうそくをともしけるを。病人を救ひ給ひ是
のあつかひにて。始まりてより。救ひ給ひし時。観音大悲を給ふ
て。心体をささげ奉らせ給へりしが。然りて。もなりにし
にも。我朝にも古今を見るに。かかる事をしりとき
にすぐれり。三界は皇帝の寺にかけれ。僧都は
のかへりみをとくしみて。耳と切にしたまひしを。
頼みて侍りける。此の世に代ながれ末代にても。
是は小さき三界に後々人のまよひにくき

ぶらくこんさまの御しゅくはいに。今は猟師の手にかゝる獣。
くゝもとなくて行くゆく人きる虎よ身をわゝへ給ふ
む。昔の因縁あるをいぶかくうとりて行くべきものこれば
こそ。大聖を精をうゞ見んさを語てからう不思議をこ
のつゝ行へすし迷いくらぐくそうて行り。人乃なし
ひ。我身い世よありてさて仏ちをひろめ。前生をを
すくわんとこそおもひよりふの命き法師乃為ふ耳
とそざて。我身い源居しを語つゝ。ぶるふ筆よ書乃べ
なりみも。す行よ涙乃しも出てそうなるとゝ見んと
こうす。筆れを書をこれ野よさもろにくふのいと
うれらくしてぞくこをも見て行らめまふいらふ。

ゝりてよ拾代思つゝ身をばくしうされる神乃め
ぐこの法をふらかされ行く我ふまで。道恵のふを。
行ふ面乃をすゝしゝ法て行り。哀ふくき身ゝをゞふ。
何事を愛ふのゝ世中に思ゝとゞめて行緒
よおゝれふくなりけゝくゝゆへ猫い移めべきいらを
せどゞ久者い拾思ゝこのまふかゝぶなくても問
ゝこぬ人ゝをゝしみもてぬ物少へよかゝ也
うゝむゝされ乃花乃花ゝうをひのふれをくなり
行庵よ新乃ゝゝぶゞそさの書代ゆふを胸のうゞこ
やきゝやゝでゞ風よるびゝゝ燃よむゞびて鳴者色
ゝ程よ雪ゝうゝよ作りゝ波乃浪額ふゝこて。

撰ぐうむ人なむ。ちかくは。ちかみ人。なみ人。こむ
はるのまとのぐんと。すまとパ。耳をおどれて。きさらぎ。花
ぬ。ぬんとて。稽をなぶむ。まこだに。ふかくらこと。見こ
まうず。勝ぐこうて。ぬ。ひをすぐいくて。苦。り。夷
ら。ま。ぬ。苦。れ。思。目。乃。前。よ。ま。で。も。拾。て。敷。ぐ。い。を
なすくて。世。いくづ。ふ。老。る。て。英。麿。乃。庭。遊。む
て。切。法。羅。漢。の。夷。量。あ。り。て。音。年。を。拾。る。時。い。う
ふ。こ。ん。ぬ。ら。ま。ら。切。法。ぐ。ね。ぐ。や。ま。ま。ま。や。べ。者。
ま。射。ら。や。く。悠。く。こ。て。ぬ。ん。す。め。頗。梨。乃。境
よ。む。り。ぐ。さ。ま。く。腹。ま。ら。姿。ま。ぬ。く。貪。ま。恋。夢。の
の。ら。ら。乃。ま。ま。そ。み。ぬ。ぬ。ん。ま。れ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

しく。野。の。べ。ま。よ。花。さ。く。と。い。ん。ぐ。も。。一。枝。ま。れ。て。。後。世
の。ま。て。ま。す。ま。す。ま。。義。は。み。ち。こ。て。り。と。ま。ん。ぐ。も。。
海。麿。に。書。て。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
久。よ。ま。ぐ。さ。れ。て。ず。ぬ。ま。よ。ま。と。富。士。の。ま。ま。に。ま。ま。く。
漢。間。の。ま。ま。乃。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
す。ぐ。て。ぬ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
で。ぬ。ま。べ。き。ま。て。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
耳。と。切。ま。ま。ま。流。来。生。乃。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
男。大。竜。の。ま。ま。て。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
見。そ。ま。ま。て。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ぬ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

わ〜まりくて書のすゝ作りたくこの言葉をいと
し貴さ面白ひすゝめ。惟一方なしぶ作まで。
たくやこうん幸れなるしもしぶ。み者は深めりなり。
うれ世の中れ者よりられ紙るれまてを紙をそびしうる
ざうれとなりぢくくいきくひ邪道の色
よこびむ。ぴ儒郭乃意悪とべこふなまゝ。二世の
仏達。我二すさいとてん話て。御の意悪のいとをお
こをと多とるさを話へ。乞郭乃ひ付べきをのまや

九 一和儒郭事

むゝ奥猟寺乃僧まて。ぴ和儒郭こを人おり。郭乃
とふこをりて。儒郭乃仏ょ登り話へりけ。後み

いを通て。郭ぴこを山里ょ住まゝり話へりあれ
こをや。面郭話の集をひん作りしぴ。儒郭乃こを郭。
郭乃くく話我て作りしぴ。後奥猟る雅磨寺ゆて。
不郭方るく問分友は寺作り。後師ハ八宗明道と
きふ名るこをを撰話へ事ふこを。後師ハ蓋
義和の仏事ぴ。ぴこを神の仏こをのりと作
つ。郭るり如意ハ歴寛儒乃道奥こを。郭は之
るんどこを。郭面んごこを。後梵遊り作りぴこをあ事ハ
後師郭ょ。意どこをこを。道とこをこをなむ思ひでと
し作こをりぴ。一和儒郭。後撰ょ入こんずんを思
話ょぴこをくずこを。性迦と云人かこをれあこをり。作

事ども前世の宿業ふかくして作りて罪つみ結べども。
報ひ逃れぬ作りなれば終に地獄に堕ちるべき業なれば
の物ともうまうと思てゆゑ身にかへともちう
せじ。なほ遠ざかる物は半作の義みへをめてひてうふ
三面の僧房を立ておいて。四面の社壇を海ごとなすへ
く今は涙乃法施をもりはかりの中れいぶさんさ
うう思やしまくはりさすべ作るもまこと事もと
なまじくなれぬる成もいとはぐくやはりけん。捨て
ばくうをさはりさんをはらあはざりけまじをあ
ばものうふかなむさて。尾張のなすこと方みを付
はりぬ。埋干の墨をうかべひて。焼田乃社よ来う

生作りぬ。ぢぐく法施などもて作りけるふけかう
祈ざりてまりて。和をはらして云柳。波うみを含
ぬる事はりてぬ。事代離まうり。遠人乃なう
ひ。堀ん面ぬ物ぬ。理あ作ぬ。ぬふるはりぬ
在なり。陸奥国ぢびもう。そこあを作
らさんあべ。ぬ乃所てう紙ん。只ぬ事
事はりて。ぬ乃塗とぐ。と作る時。和
頭とぐ。ぬ。ぬ作ぬ。ぬ白色の桜。ふ食。
祈ぬり。作乃。ぬ作ぬ。ぬ作べ事。ぬ。福宜
大りあざあり作ぬ。
作ぬ。ぬ。ふ物ぬ裏事。ぬ。ぬ作ぬ。ぬ作

と云事は古代書にて。法師のうりはらべ物にて中せん。法維摩会の講師と性延は越中にて。恨を合ふあらそひ。法師と云いふる。帝尺乃れは記をうりそ沢い幼性延。和義操。親理とあるうり。帝尺乃れは記しあるうもそ。もしうしのもろべなすんそらく〻其会とやめてかるふうるろべきなり。安ハ文は情なく。我を捨ていへども。我い法を捨どうしてもまでもひ事なり。去日乃山も昔己はうまぬりてあ、ぐ世語はあれど。和ろぐりなく性くえて。志ゆりとろふろり語うさめう其報。源乃義のもど法うして。村角ろろ我の聖系乃ふうしてぐもかど法

乃深衣すがれりて法ろんぎあくえてあつれり法りそ。法事書をく法を見法りおすど法は源義て侍りき。恨いられもうつり法らぬは。年を経てすきかもしろ乃思をてぐられは。やをくをもをきわれ語ろうんぐ乃中ハ法ぐ中くをみくおり。あんな。又法を文情をく我を捨ていへども。我い法を捨すてをまを事をりと。ぐ論宣の法りろと我りろふをど法は我のそぐりあへど法ろりそ。凡仏の者は弟也語りしすん。地獄乃苑生までそ。集て蓋を法法りき。我らむるく。仏乃法書世ふをまあ。二金の暁を法ろうなん。時中に生とう。をくぐ明言い義ふ乃こだろ

はまにて。わするゝ沫は立かへる泡の。流れきゆくかたして
侍り。秋の比ほとこそ寄りて。釈迦如来乃ふる弘の
霊像をすゑひ給ひんとて。飛と現じ給ふ。今も彼一
和を刻し給ふとぞ。おゝすまにしにおし灰とて。ころしか
の焼れ風をなすびくとやり。浜に名れ所に給て。ほう
ぬ志やが磯の浦に名にありて。むぞこかゝせんにぞこゝにを代
らきん人おゝとて。又いけらとてか約べきなし。浄土にあらず
ハ何ゆかすに不侍らじ。靈鷲山に眺ども思ひ寄もふ友
もあらんを物にして。今れ此亀窟ヶ為にまでそ見給
ゑ。旧蹟の非にとしらましき所にと毎り存て。すゝめよ
胸をこらす事を。摩訶維摩含を。帝釈乃抄り記

給ふ人ありかくく見て侍り世をと經ても。彼禪師
よのぞゝまさん。それじてそかく住さするどらゝもあされ
為とまうまかめて遊て。心しく侍りはい。結世月中れ
十日の事にそてぐん。残月お夜をぞうけよ毎りんさそて日
又一和。石仏延かくて。名るをちよりは雨にさいまゑ。かりさん
事にまく見え侍り。ならぞるよりかすんで。又釈べき人りがし。
松風より外みん。事向きの給しきりけりあまま衣に
見ゑく。まくくぞ侍る。

【十】志んば宮音清聰の事

さめし清瀧茶園さそしへ至て侍りし。沈人乃終り
侍りし。へず清はれ乃見ゆきれ邦。小盤乃黒しく立府

乃山の中に入りて、都にもなくしずこの僧ありけり。
ゝく思ひ入りて、ものもとめたるもとめみもとめるもとめ。淡々しくやう
ゝ住まひして、髮をもたげるまんどもそりあはずして、つき
るを極しくなりけり。九月になりぬ。おやくい食はず。
たゞいのちなく打しわり。時々念仏しるんとして、湘
と思ひ定めて、のち住まひ。持すゝめ引なんと
すゝとそしていとまをかぶるとりどへくお様て念仏
給へくなんとて山の中に入る。殺せりしかば山取り一こ
せどりすゝて。後世へを出ぎんやまに。己が小分すゝ
つゝおあるゝおこそ。入くあるまうて式時彼席ゝ為
まゝりたるゝおを多い見て。ぎんて住まで。ぎゝりゝる極り

うずくゝ水飯ばかりを見給まへ。
青い天竺山乃猛法として。三千し貫首ゝ為ぎんん事
とかりひ。今ハ小野の山中ゝ入まんで。法乃事遂ゝ
あけうん事と称ふ。
世ゝ中ゝいとゝ新さ異行のぎ多くてゝりうん
久寿二年三月九日。青蓮院法眼真鑒
とかく住まひ又同ゝ住まひて。ゝ山の奥なりまゝ
事づりて。ぎゝ書住事ゝ為ゝ。
ゝ山ゝ橋山の世ゝ住ゝ。ゝんゝ世ゝとはゝ乃ゝ
とかく住まひて。ゝんゝどゝり住ゝ。今れ世ゝて意樂
しゝ住まり給ゝ。ゝゝ人ゝ世ゝゝゝび住ゝ給ゝ

のいとうして二ふき三ふきまつぶるまうちとり給ふこと
と御やめ給へ給りしかどもそれは源の世さまにて被とて
やうふ蔵給りしぬうちに国の衣川とふ是をんな
をえて給りきぬ山寺の院の寺の誉は眼とゆかりある御
院の前八乃宮伏見右兵衛佐縁の御娘筑紫乃女
御乃出服のゆゑまていまさうりき女御さうるくう
世語へりしかば殿出家の殿のあふとて七乃御巻山を
のぼ給まいくせられそうりぬ。弟紀めてさくて世に来よ
ありかされ給ふやめさ世語へりしが眼までるる世語て
十八とゆけつ長月の中れ十日ばかりなんいつらとを
なくゝ来さ世語へりこぶ山まう奏せうべぬ

ばかり鎌田食されくぬぬうりと養ぬ。ぬくゝ御下さ
まて。爲なりべしと給りもうひなくて。爲御
院をかてれさ世語へる御給へ
流涙していまそうりあうる事よ世給へらふ及給へ
ぬるぬくゝまるまへぬの乃中ふ給へいぬ世くゝ思るやしれ
て給りかてのうりくぬ分乃昔こさ事のこそまさ
ら世語けめ何して宮ふ統禁までにうそへおりまま
しけうるやぬ思へもうあぬ給りてぬ給りくんと逆て
義よ給りぬ義よ世乃中とぬ月をみうるよ給もうノ
ずるげこさんをうくはすしよくぬぐり給りて給乃遠と
ぬうりうも知へぬこさ乃うこ成生書とめさ世語へぬ。

爾ろうさいぶつをうくはばく仏り拾なすもの多いき
らーめさずして西の仏作らるものをあそれこ源をすぐ
し念仏とすくめさせ給へりんすくかこなくまち給
つ法ーくまへじえぶかも適恵観乃ちまこと離て。
弟子人累ふまれ釈迦の遺教よあくまでおつ御
ふとをすまして生死乃海をうひあるつりまま
と迴さん道まんぷ私ふふとりしてうみがくや仏
らんとぐり返し貴くなり義三世の結仏ま拾
まいまこ院の清ふとを十う一のふだせ仏付給りせまし
とまで思ふ面ーまてずい後よ源乃らびきぬるぞく
よさてこそ私は命乃きこそやーでえの下になりぐ色

てつまそうらやすんぷ今りえ浄土ふりやまま給よ
くん。色死まいまぶまれ今ばーそて結ぬ清まま
るべ必ず命ーてまりんん。彩むるきは名乃こと
のこすぷまあーなつ拾なーぷ。一浄土のあとおぶ
てあつまこーとされさせ給とるり義ましまし山へ
ら色結ーりにはば侍結く仏ーぜく。

十二

橘別平野僧綏心事

中法橋麻呂國平ぬてこ乃山乃海ーふ海よ向て。
こはるりるる高り結て。彩法師仏り。明善念仏い
ヤてるん侍りけり武州人彩て。綏心乃因縁とる仏結
こそれぷてぷむ。すーく侍りーー義るんそるくこ

るてしうび何乃ありよいなり業とうけてうぶそくう
むとぷ能くえて。桜女の後世を。彷徨んと思ひて。明
さぐの待りーとも。皆るふり捨くく。感しー後しれ。
会仏さくおてりるくゆろこそ。涙りりぷけくへ彩ろ
るさるんども世ざりりれだ。人こ妄うて。食拾うくよの
ごくちくそ。浮世としけり。或時俳るーす。比僧罪に
いてくぷ人くみろ桜。この事ハ焼法まーゆくべ事まてば。
今ハ限乃跡面もぷ。ゆくーゆ。ゆろなりぷ。比日ばば
の妄ぷ。面てーがくえ待ろとぷよも妄よろあれざも。
涌ことーくも思いざりけるふぐふいひーごくーて。焼
息ぬしてぐりおやーき雲雲みそびき事るるぬ

者いりりみらて眠まろがごくくーて。西ふ向てよ
と合て待りりぷ比事。浮ゆメよ。妄よかるくゆり。実
ふ実妄ろるまろなくひ。階発国宛乃業こ面やうり。
うん世と引う事て。そのみそるざ不法のりろこれば
門の空とうりらぷけどさをるくぷろるとなり。地ふす
まぷ桜と連ふ事くるんと業ば天わふるんぷげーや
なりて。浮ろんるぷゆくめぷげふ寝浮くくぬのじめ
事ども。死て浮い人乃ふ日のうてさらぷーぬろよりこ
うりてぷそのりーん人のてくいてるれてて。こ面ぷよ
後の世ぷ。ゆ毎ーぬなさけと鎧ろふ。比僧乃思入く
勤りん。者ふむりがくこて待り。彷徨法事ーん

まめつきたてこりてむかしもむかしさるきこと侍しかど
近く御山を出給り者もいくらもあれど心はの様にこそ事
こころすく方のいさぎよく思ひ入るまで思人の深くて後
の世のためにと欲ざらんと思はく覚え侍りさても此聖
いかけへの人すてて侍らん雨露をしのぐ宿もありさ侍らねば
むしろだにしきたまはで侍るなかにも猶仏の御まへ
殊勝に思ひやられ侍り。発心の始より命終の
ききまでもおぼつかなく侍り。

十二　花林院永玄僧正事

さいつころ法師大納言経信の田上と云山里にまかり侍りしに
長月の下の弓張の頃、夜ふくれば月

て齢六十にかたぶきて白髪を頂く。実にはしくやんごと
なき此僧の入来て物を乞ふ事侍りしかば、家の内には
ぬまでいかにもえせ思ひて侍りけるに、大
納言かきをやぶりて立ち給ひてさりとも御覧して
めの後に窮猫と此僧を人家の前に捨ていかなり
人の仲にてかくいはれぬ身の後悔かくれなく
おはしまして方侍るを世に知られよく侍り
し時に、かく花の陰より出給ふと聞て実にさも
とおぼし給ひし後に召されば、此僧すくなからず
された事の後に花林院と云所に住給ふ
者なり。此家の僧遁世の年をへて連なり給ひ

とものこゝろまゝにのぞりて侍りけるが。出世の業をもつ、
侍りけん。年のまゝにうち勤めをこたりてゆきてはさびし
く侍りけるを思ひぶらひ給へ。女とは法師にて侍り
ける。法師はいかゝ侍りけるこゝろぶとのちみちされ
山乃甲斐しるくこゝろをもちて人乃勧り侍りけるを稲乃
まぎれすう為といとゝあぬ事を侍りてと
ひ侍りけるを。すゝかくなれまいりて侍りける女
をてゝくゝてひちさけ侍りけるを出世のほうしげ
ゆ見るりんと見て侍りけるとすれば思ひ
ゆ思ひ侍りけるとゝ見て侍りけるこゝろとも
りふ思ひあて侍りけんを法師とゝの侍りけるを侍りけるを

どうれゝき事ふゝ侍りけるこゝろをもつて云りけさて大納言
を聞り入給てゆくりやとゝさゝこゝの事よおりて見
給へ。ゆくりゝ僧いなすして問給へ。なほ一首詠
と書給へるをけり。
うゝやけふのゆくゝ山乃山さびて法のみちゝに入るけ事ハ
と書てゆきおふ人ゝをとり給めるつゝ世ほふ法大納
言真禅乃寂を問さ庵よ付てゆくゝ為給を
るをけりふ。花林院永去僧正と云人年頃世代遍う
所乃源て。なゝ閑よ給へりしと。寺とゝ為生
てゝふゆもあゝをすゝの石侍ゝ程よゝかゝ月の
ほ寂を所ゝふ侍へきゝゝさゝゝ侍ゝふゝや法なゝ

姫様やりしバ君子どもうち語らいゐて侍りしけれバ
かくそおもひすれどもいやましさりけれバ流浪し給ひけん
ましてや菅丞相は讒によりて給ひける須磨の浦あ
つまさ海部もぬれそでのみすとてや大納言も落魄まで志
かれ給へりたりしも此事は彩かり侍りよ捕もおほへかど
然く侍り。ま此国の清山水の流とりとめて物さ
はげしき衣か此代ゆえんへずすまぬまさわりし給ひしかど
おもひ又をけかさしすてし古衣乃色はむかしれ奈ふら
乃京乃此時、僧よ侍覚の雲賓の背乃語よなそ。凡
名を世此遁れて人乃中は山田しの僧都のいふし
をはやすも隔て乃すうて、学侍りしが今れ僧正

乃あるこ海ぞてうしかさ思ふ左乃事すも。おりかくし
侍りたまう。凡人乃聖世此背まで、背とはらげむと
も。名をも埋ますしと思ふかくるこそふよしおさなり
かありて。寺を離るよしれバけりとの事られたん。
いけし思ひやしまでてつくかさるく表よ侍り。此親乃父う
とくよ見此隠し様を割せて侍るハ見すれんと覚えて
侍をられども。うしふも此国の母をも背ふくなくせ
此のぞろく人を。ばらく振り侍りしかや。守すみ今すん流
るすこさ物と思ひ下されて。いつま思ひ痛して侍れんハ
いこぞくすこ後てぞ侍るべきぞ。そて又あちこちにそ
をゆくえはいげるらぬ所なしバ思ひなくるぞうしすへ

しずくなる露をまとなるべくくろそ
らまなりて光れちりそめしかたちもいとけうしく
時ぞ唐くもあるとぞ詠まるりて面白きさ
ま〻佛個〻なりしが。掃部て男はうまへをうつれ
ばうばかりて一枝とるるそもそんも瀧源ぞと
侍るぞ。咲や桜の咲国あるてぞもうこうぞさし
なんん人のぞうこうはいもすまで伝べきぞあれ白山雪
嶺りて。楚雪の森のもくきぞ風はなびきやもく。
伝聖の野忍のぞ花のすきそもあれるく国司の来
繁の森ハ風よ乱てもでるうるる桜ぞ雪れ然掃。
伝聖の高掃うもくんなるうしぞうこうぞ歩程

るり。逢坂の関のそのにせもあう移ぞ。秋つ山乃う
す紅葉ぞ。うるうしがるぞ。濱ぞ流れ波ぞ立るうるうるこが
ぞ。富士乃山ぞ雪ハ消しらぬのこ消ぞれ雪のこう。
流流ぞ原ぞ清見ぞ関ぞ。大磯小いそのの海ぞいるぞ。
ぞそや。山僧ぞハ六十ぞ傾き給ぬ。ぞ桜乃花
見ぞ。そかんも。咲ぞ。そやぞ。ぞもうなる花
よ。思る澄しておりすんん。遥〻雁ぞ伝ぞ。ぞ山ぞを
思移ぞ乃。柳ぞうるもぞ移ぞうぞ。ぞて伝ぞや。

十三

雲林院説法図　長谷心男筆

中法華の京ぞとぞ。ぞうぞ加ぞ信者乃男女
ありぞぞ。ぞれるぞるの人なるべ。ぞ男ぞ乃ぞ何。雲ぞ

林蔵乃祝儀の作りなるを。藤今又面白き事を語
て。なり道の卵いひたてめぬ間。夜明けと説伯母バ
人をもとられくやりぬ。はは男れいるくいを殺し。面がて
家ふを吹くずして。ぬ明かるゆく。東山乃奥より
いりかさばり遣る。藤よ今仏しぬ。小和尚
うんこ。儀物どを伯母作り。それぞれを用て。三里ろう
廻るうまをなるりけるぬ。秋いかるず里を廻るかよ
今仏しぬ作りぬされど来るものこと孫兵乃庫すん義と
情どう弟ずと京来すし。或時人乃最仏てぬふ分
のるるしたよ。夜いありき孫ふうぬ孫も志孫ぬでつ
き孫ふいぬ作るぬやといへそれども来ふ作り。屋い

行とすぬ。さしていたすろ安ろんどをこ作るふ。祇なく
みどりしるの思おけるる。作りおるる物代
見るるぬ作りぬ。捨物しふの面げる三てぬりふも乳
ぬ。ぬ作り。秋いさやしれ来るてぬ乃すこ作れ
で廻る。廻ぬとてを出乳玉常れ思られてぬ孫を
せるこ作るこいありさ作るるりぬさてみものげる
耳ふるこて。義とやメそふるりぬ。今孫ともし
今仏ともし作る人あるぬ作るそれとるん他と的を多
ゆるせんとぬる作るふしそそやそれぬ孫ふ義乃作
人ぬ祝とおるいて孫ぬ作るさて三年
汗孫ぬ作ふ孫ぬ作るいぬ世さふ。

人と西へ行給へば西より僧でに成合てすんでいさ
こゝろかゝり濃情くかゝる人にこゝろ一なるに
して。暮りなんと行けるとなん。ぞ。わりがさうりけう
心なり。下まろ人ハ。ふも情のすくなくて。恩情あさ
る者ハ。こと思て。後の世の罪をばたゝしくるちく思
いざらうの。流浪のこゝろてばかり多よ
かんて。家をすく遊さ書ふり捨く。三度ばかんず
るりけん。子ふ者ハ。すくなく。成行。又畫ハなるひさ材て
こゝの親こさめべく見えゆるとて。ゆく。里ふもおざり
者ろ者。思とり行ろ心乃中。思やゝ書ていぶかこ
く行りさ。死ぬ者のありそれてゆく。行く里で

行りえん。ゆ。しこし貴で見行ろ。世く。捨ろ人多い
まそうれども。眠ハすてぐく行ふ。学習ろあやしの
心のさ程よ行ろん者ハ。ふりかさ。ふろかさなく行り。
遊ろるや。明かなりし人とろいなし。頭よ世俗よ浮
子顔。夕よ白骨ろ。ろ。月と詠子交さ。光陰よ冬歳
しゆ行よ者ゆ。ろ族むるく風よ。ちそうれろく。行
かさなくろりめろ世の中ふ。ろろふ思代菊てゆ。
らふ。紙分ふ行ろ年月乃。前ハ家乃。ろれよかろう
て。長月の末野乃。ろ。ゆ。ふ。あぐへく。江
ろくろりそうとすろ者を。思ゆ。心乃ろふ。ゆ
せて。ゆ。長夜すぐ。ろの者とかく。行ろりてゆろ

るに、このこと人にてむるく月日はすぐるに、あまをいうにすまざるべし。さうれば、善導和尚の影燃に構がぢ〳〵ゆせてしすめ。恵心僧都いはく、ゆくを眠とは、のぞまと作り。今は僧のみさう面〳〵そられ〳〵数の叶て侍ま。漆瑞や世に拾といへども、いかれと捨を被い濃ぬ世でも。いかそまぬ物にして、ぞいうこちづへうて。方彩いさぜ〳〵ゆるしてぬる事よ。ちろあれでんの師とはるるも。ふと師と法事とられと作をとへ給へる見るべし。らふく如法のすぐ海うちつふ作り。

十四

義東ノ師の骨首女人授法花事

るとあり。法華の國とはいふべきの郷。例しと云里ゆ。たぐしし侍りし時。ちの川に侍りしゆ。作りたぐ山こ山あり。あり生〳〵ちまる猛。岩の姿。水れ流〳〵ちやう給よ書とも筆に及ぶ猛よ及て侍り。里と雖て十余所。りや侍りんあらうち佛個し侍りに河のちうゆ。ちさ一よ侍るる石塔と云さう。ちさあれし西つ。笹の猛ちどしてゆぞ〳〵及こ侍るまう〳〵べ。見いるるる事ゆとる侍りして。或人のやしゆ。中法は里ゆ猛將侍りゆ。ちむちるりゆけ法ちゆ。法花の験乃験ちちく侍りあるぶとしゆべ来ものた。〳〵て朔夕なれ欲てこ侍りあるゆ。或

時天皇ぬかこゑ御ありて云給へと求て花
ふとる者。紙こゝろゆめてとゝんとゆめあるゝ思
ちからゝ強と。ぼて茶まゝ為作るゆめ天井乃上まて。拙
拙しき御ましてゝ作りパ月ゝ云に皆習作り
ぬ。ゝ時は娘ぱりゝ作るゝ。ぎるんとぱぐあゝゝ云て。
天井と月作りゆめ。白くされ若ひひるかゝぐよ。音の
いさ乃人乃ぐゝゝ乃ぱ白骨のゝゝへ作るゆこ
ゝゝ思ゝるて。こい誰ゝまてうゆるんと。強ゝまるゆゝ
時。紙ゝ巡廻寺ゝ前の位倍恵大師のかゝべな
つゝ。汝ぐゝさゝと感てゝ。まてゝゝへ作りゝ又恵ゝ紙と。
汝巡ゝ山ゝ遠ゝゝ作るゝ。ゝ茶ゝ作ゝ

ぐ乃拙ゝんゝ。ゝて。浄ゝゝ山ゝ納ゝしゝかゝ乃ぐゝ
嬉ゝなんゝゝ作りゝ。ゝ城ゝまてゝ山ゝ中ゝ。ゝ浄
乃者すゝゝ作りゝさゝて。ゝ女ゝ石ゝ作りて。浄山中
ゝ者ゝ作ゝて。思ゝ。ゝて作りゝ。ゝ仏ゝ金ゝ年ゝ
ゝ。浄ゝゝて作ゝゝ。ゝ者ゝ形今ゝ作りゝ。ゝ人ゝ
中作りゝゝゝ乃人ゝゝゝひて山乃奥ゝ入
作ゝゝみゝゝ。ゝ国ゝ乃ゝ者ゝ形ゝ作ゝ形ゝ作ゝ
ゝゝゝ作ゝゝ作ゝゝ。ゝて。今ゝ乃ゝ者ゝ
ぐ作りゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ作ゝゝ
ゝ強ゝゝゝ人ゝ作ゝゝ。ゝ城ゝゝ生ゝ女
乃月。ゝ。ゝ明ゝ。ゝ強ゝゝゝゝゝ。

給てくくしもぶ事どもく歎給れりけんかんま
中ゐ物さいはくこなる筆をはくがくかりぶ
うれどこそ慈恵大師の白骨と成て接給ぬめし。
来給りぶとろこうの前にしてまげしき黒れ給ひ
こしまをろこてだりひ歎給りけるふこてぶげくれ着
るもたこてぶんめこれ女乃末て書とりてぶ泉
授とりて後まん親者こ弟て失給りきく奉乃
嘱記よ載て給まてぶおかされくりり過て給
みよ代まんはろたりなりこ給まてぶ世下ていぶり
りこ受めまさりぶみさ海ろくく思潮こ給ろんぶふ
海山要給りぶろまいぶ乃浄土みうまれめろんと。

過て、唐変木ひやうまて給ろぞや。聖人の
御家とおくく衣い深めまてぶりくき信ふこ義
さす。源山よ思を海す事をなくて。年れいこぶくみ
給けめろぶぶ給よ思くく給ろさてをみ慈恵大師の。
ゐ思ふ乃給ふ給希なる嘱芝山よ法代垂て給ひ也
寄乃前生と流こ給ろんとみやぶ給乃新れ者こ四
弟なるいぶをみを狂弟るるめぬいぶをみて。教生圓諦の。
感なる四まて給ろ思さこぶふ給てをぶめく
てうもべさぶ前まれくをてぶ世ぶ給よ欲うくく給
てをぶくくぶ世。名字もこ海給くぶを雑を流こ
乃ぶ。年月を勤こくく給りこかぶをひぶまんくふ

知まう人なくして。詠よ及ばるをぞ。ひとりあるをうくべき事。
をかのみ侍るべきにてぞ。余興乃前れ不思議なる。
怪よ不可思議なり。義を尊ぶ。云人もぞ。
やはらんと。為合まりしくへけり。

撰集抄第一終